

同音語と類似音語の表現

伊 藤 嘉 夫

私の家の子供たちが幼なかつた頃、このんで謡った童謡に

ふたあつ ふたあつ なんでしょね。おめ目が 一、二、二つでしょう。お
耳もほらね 二つでしょう

ふたあつ ふたあつ まだあつて おて手が 一、二、ふたつでしょう あ
んよも ほらね 二つでしょう

まだまだ いいもの なんでしょう。まあい あれよ 母さんの おっぱ
い ほらね 二つでしょう

というのがある。作者はもちろん大人であるが、子供らは、生理器官の
対照に二つあることのおどろきをいったこの童謡を、さまたのしげに歌
うのであった。子供は直感によって本能的にこれらに興味をもつのであ
る。身体的器官の対照に二つあることから、本能的に二者即一の考えの
おこることは極めて自然で、これは外物においても内心の概念において
もそうである。日本神話における神々の名は、高御産巢日・神産巢日、
天常立・国常立、伊耶那岐・伊耶那美などと同音をふくむ類似音語の対
比的にいわれているのも、そうした概念に添って考えられる。

日本武尊が、東征の帰途、かねて期^{きもち}られた尾張の美夜受比売を訪はれ

同音語と類似音語の表現

たが、その襲の裾に経血のついていたのを見て

久方の天の香具山 利鎌にさわたる鶴 ひはほそ手弱かひなを 枕かむとは
我はすれど さ寝むとは我は思へど 汝が着せるおすひの裾に 月立ちにけ
り

と日本武尊が歌われたのに対し、比売は

高光る日の御子 安見し我が夫君 新玉の年か来経れば あら玉の月は来
経ゆく うべなうなべ君待ちがてに 我が着せる襲の裾に 月立たなむよ
と答え歌われた歌がある。呼びかけの歌に対して、答えの歌は、同語を
用いて詠んである。これは一種の対照意識であつて、爾後の歌において
も同様のことが言える。

道の後古波陀嬢子を雷のごと聞えしかども相まくらかく
道の後古波陀嬢子は争はず寝しをしぞも愛はしみ思ふ
はし立の倉梯山を嶮しひと岩かきかねてわが手とらすも
梯立の倉梯山は嶮しけど妹と登れば嶮しくもあらず（以上古事記）
吾が里に大雪ふれり大原のふりにし里に降らまくはのち
吾が岡のおかみに言ひて降らしめし雪の碎けしそこに散りけむ
み薦刈る信濃の真弓吾が引かばうま人さびて否といはむかも

み薦刈る信濃の真弓引かずして強作るわざを知るといはなくに(以上万葉集)

君や来し吾や行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てかさめてか

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつとは世人定めよ(古今集)

霊山の釈迦の御前に契りてし真如くちせず相見つるかな

迦毘羅衛に共に契りし甲斐ありて文珠の御顔相見つるかな(拾遺集)

雪つもる年のしるしにとどしく千年の松の花さくをみる

積るべし雪つもるべし君が代は松の花さく千度見るまで(金葉集)

思ひいづる折りたく柴の夕けぶりむせぶもうれし忘れがたみに

思ひいづる折りたく柴ときくからに類ひ知られぬ夕煙かな(新古今集)

明けくれて日頃へにけり卯花のうき世の中に眺めせしまに

いとどしく日頃へゆけば卯の花の憂きにつけてや忘れはてぬる(玉葉集)

これら、贈答の歌を時代にそってあげたが、期せずして、贈られた歌に

対して「かへし」の歌は、同語を用いることを忘れてはいない。贈答は

二首であるけれども、これは関連連して一体となって存在するといっ

てよい。二者即一の觀念である。又贈答ではないが、同じ場所で詠んだも

ので、わざわざ前歌を、別人がとり用いて詠んだという例もある。

高円の野の上の宮はあれにけり立たしし君の御代遠ぞけば(家持)

高円のをの上の宮はあれにけり立たしし君の御名忘れめや(今城)

これは、二首関連一対として存在しなければ意味をなさない。

萬葉集に、「問答」と題して二首並べ出すものがある。これは誦われ

たものと思われて、歌詞に音調的工夫が見える。

雷神のしましとよもし刺しぐもり雨も降らぬか君をとどめむ

なるかみのしましとよもし降らずとも吾は留まらむ君し留めてば」

布細布の枕うごきて夜もねずおもふ人には後もあふものを

布細布の枕も人にこととへやそのまくらには苔生ひにけり」

門たてて戸はさしたるをいづくゆか妹が入り来て夢にみえつる

門たてて戸はさしたるをいづくゆか妹が入り来て夢にみえつる

これらは、作品として二首一体をなすもので、あたかも二人で唱和した

ようにはなっているが、恐らく一人の作であろうと思われる。これは

二首一組として、ほがひ人などにより、短い唱和のための、云わば台本

のようなものということが出来よう。贈答歌のように、二首の間には、

同音同語の共通語をもって、二首のあいだに血脈が通じている。

五七七の片歌は、はじめ、「新治 筑波を過ぎて 幾夜か宿つる」と

日本武尊がたずねられたのに、御火焼の老人は「かかなべて 夜には九

夜 日には十日を」と詠んだように、唱和されたものであったが、これ

を一人で詠むようになったのが旋頭歌である。その名残は、

白玉は人に知らえず知らずともよし 知らずとも我し知れば知らずともよし

橋立のくらはし山に立てる白雲見まくほり我がするなへに立てる白雲

はし立の倉梯川の河の静すげ わか刈りて笠に編まなく川の静音

山代の久世の社の草な手折りそ わが時と立ち栄ゆとも草な手折りそ

海の底奥つ玉藻なのりその花 妹と吾とここに在りと莫告藻の花

水門の葦のうれ葉を誰か手折りし 吾背子が振る手を見むと吾ぞ手折りし

五七七と五七七の唱和の痕跡が同語を互において、明らかに見えるよう

である。これがやがて、柿本人麿歌集の旋頭歌

新室を踏みしづむ子し手玉鳴らすも 玉の如照りたる公を内にも申せ

ますらをの念ひ乱れて隠せる其の妻 天地に通る照るとも顕れめやも

柏錦紐の片へぞ床に落にける 明日の夜し来なむといへは取置きて待たむ

というように一貫したものになっていった。

一首の中に同音語の頻出する表現は、短い詩形でありながら、一つの

表現形体となっている。速須佐男の命が、八俣の大蛇を退治して、櫛名田比売の危難をすくい、これをめとって出雲の須賀の地に宮造りされた時に、その地から雲が立上ったので、

や雲立つ出雲八重垣妻こみに八重垣つくるその八重垣を

と詠まれたとある。これは国歌の淵源であるとされるものであるが、この歌には、や雲、出雲と「も」を語尾とする類似音語、や雲と八重垣は頭韻やを持った類似音語、然も八重垣は三度頻出してゐる。音調を重ねることによって、歌謡としての機能を發揮するものである。これは物語の中にあつて、いまの浪曲が、ふしと語りとがあざなわれるように地の文の語りの中にあつて、歌謡は、節の部分成し、物語が歌物語としての変化をつけるのであるから、紀記歌謡は、後世和歌ほど文学性の職能發揮に、いまだ至らぬ歌謡性のつよいものである。

難波津にさくやこの花冬こもりいまを春べとさくやこの花

は、王仁が仁徳天皇の即位を慶祝して詠んだ歌とされ、古今集の序に「あさか山影さへ見ゆる山の井の浅き心は吾が思はなくに」の歌と共に「歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける」とあり、古くから知られたのであるが、「さくやこの花」の句は、第二句と第五句に重ね用いられている。歌謡の上の韻きを考へてのことで、朗誦してその効果がわかる。二句五句の同句併用は

吾はもよ安見見得たり皆人の得がてにすとふ安見見得たり
あしひきの山の雫に妹待つと吾立ちぬれぬ山のしづくに

をはじめ少くはない。二句切れの場合に効果がある。二句で切り、四句

同音語と類似音語の表現

で納めて、更に五句で強調するのである。こういうくり返すと、古事記中巻、建波邇安王の反逆の条に、

御真木入日子はや 御真木入日子はや 己が緒を盗み殺せむと 後つ戸よい行き違ひ 前つ戸よい行き違ひ 窺はく知らにと 御真木入日子はや

とある歌謡は、「御真木入日子はや」の句を冒頭にくり返している。冒頭に語句をくり返すのは、「出て来い 出て来い 池の鯉」「宮さん 宮さん お馬の前に」「春が来た 春が来た どこに来た」など今の歌謡にもその例が多い。このくり返しい、「ポッポッポ、鳩ポッポ」「ナンナナンナン南京さん」「トントントントンカラリと隣組」と、音だけが先行することになる場合もある。弟橘比売の、

さねさし相模の小野に燃ゆる火のほ中に立ちてとひし君はも（古事記）

は、「さねさし」のさの音が相模にひびいて枕詞になる。

ほととぎす鳴く峯の上のうのはなのうきことあれや君が来まさぬ（万八）
青柳の枝切りとほしゆだねまきゆゆしき君に恋ひわたるかも（万二）

これらも一音をささいだして枕詞になっている。多くは二音以上にひびあつて同音語をささい出す。初句に枕詞をおくものに

のちせ山のちも逢はむと思へこそ死ねべきものを今日まで生けれ（万四）
音羽山おとにききつつ逢坂の関のこなたに年をふるかな（古二）
あは島のあはじと思ふ妹にあれや安いも寝ずて吾が恋ひわたる（万二）
たちごもの立ちのさはぎに相見てし妹が心は忘れせぬかも（万二）
さゆり花ゆりも逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ（万二）

最後のはさの接頭語がついているが、出だしの音が次の同音語を呼び出す。しかし短歌の五七五七七音律の三句における五音は、この活きをするのに都合よく、多くはここに枕詞がすわり、序詞の形をとる。

わが聞きし耳によく似る葦のうれの足痛む吾背つとめたぶべし (万二二)
 道のべのいつしば原のいつもいつも人のゆるさむことをし待たむ (万二一)
 一大船の香取の海にいかりおろしいかなる人か物思はざらむ (同)
 大君の御笠に縫へる有馬誓ありつつ見れどことなき吾妹 (同)
 住の江にむかへるあはち島あはれと君をいはぬ日はなし (万一二)
 秋風になびく川びのにこ草のにこよかにしも思ほゆるかも (万二〇)
 佐保川にこほりわたれるうすら氷のうすき心をわが思はなくに (同)
 父母がとののしりへの百代ぐさもよいでませわが来たるまで (同)
 最上川上れはくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり (古二〇)
 ほととぎす鳴くや五月のあやめぐさあやめもしらぬ恋もするかも (古二一)
 白雲の八重ふりしけるかへる山かへるがへるも老いにけるかな (同)
 いずれも、枕詞の 冒頭の二音もしくは三音をうけたものである。語意を疎外して音だけをうけたものが上乘で、「うすら氷のうすき心」などはいまだしい。冒頭の音でなくて、

草香江の入江にあさる芦たづのあなたづたづし友なしにして (万四)
 波間より見ゆる小島の波久木久しくなりぬ君に逢はずして (同二一)
 又、直ちに受けず、語をへだててうけるもの

みなとあしにまじれる草のしり草の人みなしりぬわが下おもひ (万二一)
 秋がしはうるは川べのしぬの芽の人にしぬべば君にたへなく (同)

又、枕詞の末尾の語をうけていう尻取り形式のものがある。二音をうけるもの一音をうけるものがある

なまよみの甲斐の国うちよするがの国と…… (万葉三)
 まそかかみ見ませわがせこわが形見もたらむときにあはざあらめや (万一二)
 まそかかみみぬめ (敏馬) の浦は百舟のすぎてゆくべき浜ならなくに (万六)
 まそかかみみ、なふち (南淵) 山はけふもかも白露おきに紅葉ちるらむ (万一〇)
 又、用言の活用に似た類似音語として枕詞をうけるものも多い

……生れましし神のことごと つかの木のいやつぎつきに…… (万一)
 石の上布留の山なるすぎ群のおもひすぐべき君ならなくに (万三三)
 秋さらば雁とびこゆるたつた山たち、てもあても君をしぞ思ふ (万一〇)
 大原のこのいちしはのいつしかと思へる妹に今宵逢へるかも (万四)
 吾妹子をききつが野べのしなひねぶわれはしのばず間なくし思へば (万二)
 鎌倉のみこしの崎の岩くゑの君がくゆべき心は持たじ (万一四)
 御狩する狩場の小野のならしばの馴れはまさらず恋こそまされ (万一二)
 のと川ののちには逢はむしましくも別るといへば悲しくもあるか (万一九)
 をふの浦に片枝さし覆ひなる梨のなりもならずも寝てかたらはむ (万二〇)
 更に全く類似音にかかるものに、次のようなものがある。

浅茅原つばらつばらに物思へば古りにし酒の思ほゆるかな (万三三)
 つばなぬく浅茅が原のつばすみれ今盛りなりわが恋ふらくは (万八)
 ま菅よしそがの川原になく千鳥間なし吾が背子わが恋ふらくは (万二二)

枕詞は、右にあげた例によって、明らかなように、同意語、類似音語の受けわたしのおもしろさに支えられたもので、「浅茅原つばらつばら」と音の受けつぎのおもしろさは、意味をこえて、むしろ意外な概念と對比するところにおもしろ味は出る。まずげよし蘇我の川原は、なまじいに蘇我の川原には、よい真菅がない方がよい。「さゆりの花の後も逢はむ」などは、気が利いていると云ってよい。このさゆりの花とゆりとの二者即一にするのは音そのものである。これも前にあげた身体器官の二者即一の觀念に通ずるものである。単一では存在しない機能が、二者の対比全体によって生れる。それは二眼の存在が一眼ではたし得ない遠近感をとらえ、一耳のとらえ得ない方向感を、各二者存在によって生じさせたように、音によってつなぐ枕詞の機能なのである。(意味で係かる

枕詞については本稿ではふれないが、これも同様であるといえる)

尾張に直に向へる 尾津の崎なる 一つ松あせを 一つ松人にありせば 太刀佩けましを 衣きせましを 一つ松あせを (古事記)

で、「一つ松」は三度出て来る。いかにも口誦性のゆたかな歌である。

口誦性を多く持った万葉集にあつては、同語、同音語の頻出する歌は比較的多い。

淑き人の吉野よく見てよしといひし吉野よく見よ淑き人よく見つ

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとはまた来じといふものを

あづさ弓ひきみゆるべみ来すは来ず来ば来そをなぞ来すは来ばそを

これらの表現は、近世の

行きかかる来かかる足に水かかる足軽いかるお軽こはがる

瓜売が瓜売りあるき売り残り瓜売りかへる瓜売の声

などの品の下ったものとはちがつて、音声表現にたえる風格を持っている。近世の歌も、心学とか道話とかの場において、口誦的に表現されたものではあつたであろうが、万葉時代において、互の心の中に歌があつて、ひびきあう心の調の中にうたい上げられた歌と、庶民にむけて「語るなど人に語ればその人も又語るなど語る世の中」などと倫理や人情を五七五七七の短歌の形にのせていったように、度をこえた同語の頻出が、一種の滑稽感を生ませるのが一つのねらいにさえなっているのである。万葉の例をあげたような、同語同音の頻出して、音調的諧調をつくった歌は、文字表現を主とする時代になつては、同音語の頻出が、かえって視覚的に煩瑣となるので、自然とさけられるようになり、そうした作品が少くなつたのである。

同音語と類似音語の表現

古事記や風土記にある地名説明説話、

かれこを以ちてその速須佐の男の命、宮造るべき地を出雲の国に求ぎ給ひき。ここに須賀の地に到りまして詔りたまはく「吾此地に来て、我が御心清浄し」と詔り給ひて、其地に宮造りてましましき。かれ其地をば今に須賀といふ。(古事記上)

意宇と号くる所以は、国引きましし八東水臣津命、詔り給ひしく、八雲立つ出雲の国は狭布の稚国なるかも、初国小さく作らせり。故、作り縫はなと詔り給ひて……中略、……今は国引き終へつと詔り給ひて、意宇の社に御杖つき立てて、意恵と詔り給ひき、かれ意宇といふ。(出雲風土記意宇郡、国引の条)

昔者、日本武尊、行幸しし時、此津に至りますに、日、西の山に没りて、御船を泊て給ひき。明くる旦、遊覧すに、船の纜を大き藤に繋ぎ給ひき。因りて藤津の郡といふ。(肥前風土記藤津郡)

古老のいへらく、郡より南、近く小さき丘あり、かたち、鯨鯢に似たり。倭武天皇、よりて久慈と名付けたまひき。(常陸風土記、久慈郡)

伊奈加川葦原の志許乎命、天日槍命と国占めましし時、嘶く馬ありてこの川に遇へりき。故伊奈加川といふ。土間の村、神衣、土の上に附きき。故、土間といふ。(播磨風土記宍禾郡)

などは、いずれも、同音を凝して地名の説明をしている。中にはそうしたことの真実もあるであろうが、必ずしも信用しがたいと思われるものもある。同音語の多い国語において、同音を以て地名又は語源を説明することに、興味を持ちがちである。

天喜三年の物語合に、十八人の女房がそれぞれ、自作の新作物語を出して合せたうちに、小式部という女房が、「逢坂越えぬ中納言」を出している。それが堤中納言物語の十種の短篇物語の中に入っている。それ以外の物語の作者はわからない。堤中納言物語の題名について諸説があ

るが、堤中納言なる人物はこの物語の中には出て来ない。「堤中納言」は人名でなく、「中納言局」という女房がつねに「包み」に入れて持って居た短篇物語で、包みに入れて中納言が持っていた物語であるという説がある。同音語と展開させて説明したものである。

宇治拾遺物語に「大童子鮭ぬすみたること」というのがある。

これも今は昔越後国より鮭を馬におはせて廿駄許、粟田口より京へおひ入れけり。それに粟田口の鍛冶が居たる程に、いただきはげたる大童子のみみしぐれて、物むつかしう、うららかにみえぬが、此鮭の馬の中に走入りけり。道はせばくて、馬なにかとひしめける間、此の大童子走りそひて、さけを二つ引きぬきて、ふところに入れてけり。走り先立ちて、童の腕くびをとりて、引とめていふやう。「わせんじやうは、いかで鮭を盗むぞ」といひければ、大童子「さる事なし。何を証拠にて、かうは宣ふぞ、わぬしがりて此の童におほすなり」といふ。かくひしめく程に、上り下る者、市をなして行きもやらで見あひたり。さる程に、この鮭の綱丁、「まさしくわせんじやう盗りてふところに引き入れつ」といふ。大童子は又、「わぬしこそ盗みつれ」といふ時、此の鮭につきたる男、「せんずる所、我も人もふところをみん」といふ。大童子「さまでやはあるべき」などいふ程に、此の男袴をぬぎて、ふところをひろげて、「くは、見給へ」といひて、ひしひしとす。さて、此の男、大童子「つかみつきて、「わせんじやう、はや物ぬぎ給へ」といへば、童「さまあしとよ。さまであるべき事か」といふを、この男、ただぬがせて、前をひきあげたるに、こしにさげ二腹ふたはらにそへてさしたり。男「くはくは」といひて引出したりける時に、大童子うち見て、「あれ勿体なきぬしかな。かやうにはだかになしてあきらんには、いかなる女御后なりとも、こしに、さけの一二隻なきやうはありなんや」といひたりければ、そこら立ちどまりて見る物ども、一度にはつとわらひけるとか。

これは全く、鮭の一二隻と、裂けの一二尺の同音語の掛け言葉だけの話で、いかにも明朗な風流譚となるのである。

鐘が鳴るのか 撞木が鳴るか 鐘は鳴らない 撞木も鳴らぬ 鐘と撞木の間がなる

というが、掛け詞はまさにそういう境地の趣きである。一語の音が、さながら同音の他語をさそって、相ひびきあつてかもす一種の不合理を調和したおもむきなのである。

1 山里は冬ぞさびしきさまさりける人目を草もかれぬと思へば
2 晴れやらぬ身のうきぐものたなびきて月のさはりとなるぞ悲しき
1は、人目が離はなれ、草も枯かわれるのを一語のかれぬの音にかねさせたおもしろみ。2は浮き雲のたなびきにより、月が影になると、月径とをかねて詠んだ、ともにかけ詞で、この技法は、万葉から近代短歌の曙にまでつづいた。

造形表現を、形ある世界共通語であるとする説とやや似ていることは、文字による表現が、音声をはなれた言語の造形としての感覚に近い弁別性を持つのは、ことにこれが表意文字の表音的に用いられた場合に甚だしい。日本人の姓名における文字ずかいは、音として文字を用いつつ、その文字の意味を裏にもっているものであって、そこに弁別感が生じる。たとえば、一子、和子、加寿子、万子、など、いずれもかずこの音をうつつして、声に出して呼んでも、ローマ字で書いても同じになるにもかかわらず、一は他を同一のものとは考えないのである。ことに女性の名前における同音語の文字の遣いわけは、本学在学生一四七二名について調べてみた結果、

(あけみ) 朱実・曉美・明美・あけみ (あきこ) 章子・昭子・彰子・顯子・曉子・晶子・嘩子・秋子 (えいこ) 映子・瑛子・英子・栄子・恵以子 (か

ずこ) 和子・一子・加寿子・加津子 (かずよ) 和代・一世・和世・加寿世 (きみこ) 公子・喜美子・貴美子・君子・嬉美子 (きようこ) 京子・享子・恭子・鏡子 (けいこ) 桂子・圭子・契子・珪子・けい子・恵子・啓子・奎子・敬子・佳子・慶子・景子・慧子 (じゅんこ) 純子・順子・淳子・潤子 (すみこ) 澄子・純子・寿美子・すみ子 (かよこ) 加代子・嘉代子・佳代子・佳世子・かよ子・カヨ子 (たかこ) 崇子・貴子・高子・孝子・隆子・たか子 (としこ) 敏子・俊子・寿子・年子・都志子・とし子 (ともこ) 朝子・友子・知子・智子・朋子・とも子 (のりこ) 典子・則子・憲子・範子・紀子 (はるみ) 春美・晴美・春海・治美 (ひさこ) 久子・寿子・尚子・比佐子・ひさ子 (ひろこ) 広子・弘子・裕子・寛子・博子・浩子・比露子・ひろ子 (まさこ) 正子・雅子・真子・真佐子・政子・昌子・方子 (みきこ) 三貴子・美樹子・美喜子・幹子・みき子・美木子 (みつえ) 三枝・三恵・満枝・光枝・美津枝・みつ江 (みちこ) 美智子・三知子・美知子・三千子・倫子・理子・路子・道子・通子・方子・みち子 (みえこ) 美枝子・三重子・美恵子・三枝子・三恵子・みえ子 (よしこ) 良子・吉子・嘉子・芳子・美子・祥子・喜子・義子・佳子・世志子 (ようこ) 羊子・洋子・容子・蓉子・曜子・用子・陽子・耀子・葉子 (れいこ) 礼子・麗子・令子・玲子・れい子

同音の名が、四通り以上に書かれてものをひろった。三通り、それ以下は夥しい。名前は、声に出して呼ばれば返事をし、ローマ字や仮名で書けば、その発音通りで自分の名であると認めるけれども、同じ発音でも、文字のちがった名は、自分の名とは思えない。甚だしい異和感がある。伊藤義男様などという葉書が舞いこむと、誰か他人のもののような気がする。菊池寛が、菊地寛と宛名の書かれた手紙は、けて封を切らなかつたというが、名前の文字を書きちがえられるほど不愉快なことはない。名前は、発音がそうであることだけでなく、文字の字面も名前でない。

同音語と類似音語の表現

あって、二つが共に名前である。命名するのに、発音から先につけられたり、文字から先につけられたりする。私の子供に、冬至に生れたので柚子にちなんで柚香とつけた。それは、「ゆか」という音に文字を与えたのではない。めぐみという名をつけたくて、文字を求めて萌とつけた人がある。芽ぐむから萌をめぐみと読ませた。少々読みにくい。めぐみは恵の字がよく使われる。文字から来るのも、父が清太郎で娘が清子、耳で聞いては何のゆかりもない。男の子で「不美男」と名づけたりすることもあるが、女性に「不美子」はなくて「富美子」「芙美子」「三子」「史子」「文子」「典子」無難な訓みか、美しかったり、縁起のよい文字が撰ばれる。日本に通用する漢字は、いく通りかの音、訓、あて訓みなどあって、ただ文字を見ただけでは、何とよんでよいかわからない場合がある。「吉川佳子」と書いたとて、ヨシカワ・ヨシコにかぎらない。苗字は、ヨシカワ・キツカワと二様に、名は、ヨシコ・ケイコ・カネと三様によめて、組みあわせれば六通りの読みが成り立つ。斎藤茂吉が茂吉であったり、福沢諭吉がユキチを取って雪池と号したりしたのは勝手であるが、音声表現と文字表現と一体にして名が成立するけれどもその文字表現は、必ずしも、明確に読みを限定されたものとはいいがたなく、もともと名前は、呼ばれる音声語が本体ではあるが、文字表現だけ後の世に残って、その読み方の不明になったもの、式子内親王、選子内親王など、必ず、そう読んだはずがないと承知の上で、音読しているのは、それより仕方がないからである。また、たとえば、よしこという名は、本学在學生では十通りの文字が用いられているが、なお、「三ヶ島

葭子」「山口淑子」など、更にいく通りも考えられて、呼んだだけでは字面はさぐられるものではない。名前の同音語を、書きわけるといふことは、ことに女の場合、あさ・みか・せん・とめなど二音にするか、これに、子、枝、乃などの接尾語的のものもつける、変化は上の二音にかざるので、同音名が多くなるのであり、これを弁別するために文字は入念に案じ撰ばれることになり、この、多彩な同音語の形の上の変化を与えることになったのである。

猶これによく似たのに、外来語を文字に移して、あたかも同音の日本語を作ったようなものもある。「倶楽部」「月沈原」などは名品で、奈翁は少怪やしく、沙翁は頂けない。剣橋は別口で、桑港はわからない。

落語や漫談は、同音語や類似音語を手がかりに、聴衆の連想から来る興味をさそったり、案外の感に笑をさそったりすることが多い。そこつ者の熊さんが。お店の旦那のところへ年賀に行き、おせじを並べてよいお年玉をもらおうと、その言葉を教えられて行くが、さてかんじんの処で「長者になられた」というのを「亡者になられた」といいそこなって追いかえされるというような落語は古典に多い。

同音からの連想で縁起をかつぐのは、商品で、する(産をなくする)に通ずる磨るの語を忌んで、「あたり箱(硯箱)、あたり木(すりこぎ)など、いまでも言われる。四の音が死に通ずるので病院では、患者の心を刺激しないように、病室に四号室は無い。戦時中、軍病院でも、第四病棟はなく、第三の次が第五になっていた。

私が少年の頃、父から素読をうけた日本外史で、清盛の父忠盛が、伊

勢から上って、禁中の警護にあたったが、時に賊をとらえたりして功をあげたので、朝恩のめでたく、何かと引き立てられるのを、殿上人はひそかにそねんでいた。忠盛はいわゆる田舎侍としてさげすまれていたのに加えて、「一目眇タリ」と、斜視で風彩も上らなかったで、殿上人は、はやし立てて「伊勢ノ瓶子ハ酢瓶ナリ」とからかった。「ケダシ国音瓶子ハ平民ニ通ジ、酢瓶ハ眇ニ通ズルナリ」と、外史子は註している。これは、五十余年前私の十子の頃の記憶で、多少の誤りはあるかもしれないが、大すじはこのようである。当時、内容を以てからかた殿上人のいじわるさもさることながら、同音語のたわむれ自体について興味を感じたことの深さが、同音語談義をしているうちに、忽然として五十年前の記憶がよみがえって来たのである。

よく、贈り物に、履物や、靴下などがおくられるのも、「お足が入る」ということばが、「お金が入る」という縁起にむすびつくのである。正月のおせちに用いられるものにも私の生れた岐阜では、黒豆の中にかち栗をいれ、なますの中に干柿を入れるのが、これは、「健康でくりりかき取るように」というのだと聞かされた。商売はんじょうを祈念してのことである。

生活の中に同音語の縁起は、調べればまだまだ多くある。筈である。